

亡き娘に誓う、交通死傷ゼロの社会を

北海道／前田敏章さん

歩

道に降り積もった雪が、昼下がりの太陽に照らされてキラキラと光を放っています。街路樹のすぐ脇に建つ観音像を見つめながら、前田敏章さん(67歳)は静かな口調で語ります。

「ここで雪かきをしていたら、通りかかった見知らぬ方が『千尋ちひろさんのお父さんですか？ いつも拝ませていただいていますよ』と声をかけてくださいました。有り難いですね。今日は娘の月命日なんです」

札幌市にある現在の自宅から車で約1時間。千歳市のこの場所は、22年前、17歳だった長女の千尋さんが突然命を奪われた現場です。

「10月25日、友だちと車で別れた千尋は、赤い傘を差し、日の暮れた道を自宅に向かっていました。その途中、後ろからきたワゴン車に衝突されたのです。駅まで送ったときの『行ってきます』というあの声が、今も耳に残っています」

見通しの良い直線道路。加害者は銀行のATMへと急ぎながら、時刻を確認するためカーラジオに手を伸

千歳市北信濃の事故現場に簡易歩道が設置されたのは、千尋さんの事故から2か月後。加害者への刑罰は、執行猶予付きだった。その悔しさが前田さんの活動の原点となっている。



ばし、その操作に気を取られて前方を見ていませんでした。千尋さんには何の落ち度もない事件^{じけん}でした。

高校教員だった前田さんにとって、潑刺^{はつさ}とした同年代の生徒たちと向き合うことは、ときに胸が張り裂けるほど辛い日々でした。けれど4年が過ぎたあるとき、交通事故死した友人を悼む^{いた}高校生の作文の中のこんな一文が目にとまりました。

『交通事故が起こるのは仕方がない』『車によけてもらおうのではなく自分からよけるようにしなくては』

このとき前田さんは、「交通犯罪に寛容な、このクルマ優先社会自体を変えなくてはならない」と、強く思うようになったのです。

1999年、「北海道交通事故被害者の会」が立ち上がりました。警察と連携しながら活動を行う日本で唯一の被害者団体です。

前田さんは結成初期からこの会の代表を務め、相互支援と法や制度の改善を求めるさまざまな活動を行ってきました。2000年からは同じ体験をした遺族とともに、要請に

事故現場に佇む「聖千尋観音」。「娘の死を決して無駄にはしない」、その思いを込めて事故から4年後に建立された。



えて学校や地域での講話活動を続け、前田さんの講話回数は計415回、聴講者数は延べ6万8千人に上るといいます。

『「命の大切さを学ぶ教室」で私の講話を聞いた生徒たちから、たくさんの感想文が届きます。こうした取り組みが、若者たちの心に届いていると思うと、本当に励みになりますね』

観音像の優しくふつくらとした頬は、在りし日の千尋さんの面影をしのばせます。台座には、こんなメッセージが刻まれていました。

『私の犠牲を無にせず、子供やお年寄りも安心して歩ける、人に優しい社会を創ってください』